

『ある婦人の肖像』 イザベルの存在意味

On the Heroine in *The Portrait of a Lady*

岡田 慶子
Keiko OKADA

Keywords : Henry James, *The Portrait of a Lady*, Isabel, international theme

キーワード : ヘンリー・ジェイムズ、ある婦人の肖像、イザベル、国際テーマ

1. 序論

ロンドンから電車で南西に約一時間、Ashfordで乗り換えて、さらに二両編成の小さな電車で約20分行くと、そこには、イギリスで最も美しい町の一つに数えられ、古戦場Hastingsの近くに位置する、歴史色豊かなRyeという小さな港町がある。駅を背にして真っ直ぐに伸びた坂道の向こうには、赤い屋根の街並みが見えている。坂を上って行くと、町の中心にある、12世紀に建てられたSt. Mary教会の塔の上からは、さほど遠くないところに海岸線が見え、先ほど頭上に垣間見えた家々の赤い屋根の街並みが眼下に広がり、その美しい光景に思わず息を呑む。頭上には、何羽ものカモメたちが大きな鳴き声を上げながら、気持ちよさそうにすぐそばを飛び交っていく。眼下には、何世紀もの歴史の息吹が随所に遺されており、今ここに立っている自分と共にある現在と、長い時を隔てた遠い過去、そして、現在とこれからの未知の未来とが自然につながり、これからも継続していくのだという不思議な感覚を覚える。前世紀初頭、この光景の中にいたHenry James (1843-1916) もおそらく同じような感覚を体験したのだろう。

今を遡ること1897年、アメリカとイギリス両岸における偉大な小説家、Henry Jamesは、この町の空気に魅せられ、土地の有力者所有のLamb Houseを永住目的で手に入れた。彼はこの屋敷の二階Green Roomで、第三期の三傑作、*The Wings of the Dove* (1902)、*The Ambassadors* (1903)、*The Golden Bowl* (1904)を生み出し、New York版全集ための改訂と序文執筆にも力を注ぐことになる。Jamesは、小説を芸術の域に高めることにその生涯をささげ、大西洋岸の新旧の空気や文化の狭間の中で、両者の遭遇の中で生じる軋轢や齟齬を描き出し、そのいわゆる「国際テーマ」において19世紀末から20世紀にかけて様々な小説作成上の新機軸を展開

した。彼は、「視点」の作家とも称されているが、それは「作中の一人の人物に観察の眼を与え、その人物を通して他の人物の行動および心理を写し出すと共に、その一人の人物の内的世界を直接読者に伝える創作手法」であり、そのアプローチによって「実際にこの世に生きている意識の状態にそっくり」な世界を作品上に展開させることができたのである。⁽¹⁾

本稿では、このLamb Houseでの改訂によって生まれ変わった作品群の中から、第一期の最高傑作、*The Portrait of a Lady* (1881) という長編小説を取り上げる。作家自身の手による最後の大幅な改訂によって、よりドラマチックな仕上がりとなったこの作品は、—— Imagery is frequently sharpened, made bolder and more dramatic. Many well-known lines in the novel occurred only in the course of the final revision.⁽²⁾ —— Isabel Archer という22歳のアメリカ出身の女性が、父親の死後（二人の既婚の姉はいるが）身寄りがなくなり、ヨーロッパで暮らす富裕な伯母一家に招かれて、故国アメリカを離れヨーロッパに暮らすようになる経緯を描いている。イギリスに渡ってからほどなく伯父が亡くなり、彼女は思いがけず六万ポンドもの（当時で約30万ドル、現在の価値ではその数十倍になるという）⁽³⁾ 多額の遺産を受け取ることとなり、当初、「自由に生きる」ことをその第一の信条として好条件の求婚を跳ね除けていたはずのヒロインの人生は、財産目当ての結婚という罠に嵌ってしまい、その結婚から三年後の彼女の「自由」は抑圧的な枷の中に閉じ込められてしまっている。アメリカを体現すると思われるうら若き清廉なヒロインが、彼女を取り巻くヨーロッパ世界の中でどのように生きていくのかを、彼女自身と登場人物たちのそれぞれの視点から考察し、そこから浮上する普遍的な人間性と人生に対する作家からの提言を探りたい。

II. Isabelの視点

'I suppose you're one of the daughters?'

Isabel thought she had very strange manners. 'It depends upon whose daughters you mean.'

The late Mr Archer's --- and my poor sister's.'

'Ah,' said Isabel slowly, 'you must be our crazy Aunt Lydia!' (80)⁽⁴⁾

（「あなたが娘さんね」イザベルは大変ぶしつけな態度だと思った。「誰の娘だとおっしゃるのかしら」「亡くなったアーチャーさんの、私の可哀想な妹の娘のことよ」イザベルはゆっくりと言った。「まあ、あなたがあの頭のおかしいリディア伯母さまのね」）

この物語の初めは、イギリスのアフタヌーン・ティーの場面から始まる。アフタヌーン・ティーから連想される女性の姿はなく、ロンドンからおよそ40マイル離れたGardencourtという立派な邸宅の庭でゆったりとした午後を過ごしているのは、三人の紳士たちである。アメリカ出身だが永住先のイギリスで銀行家として成功し、巨万の富を築いたが現在は体調の優れない

Daniel Touchett とその息子 Ralph。この息子は幼少よりイギリス育ちだが、アメリカで学位を取得し、オックスフォードでも学んだが、その前途は病気のために閉ざされ療養生活を余儀なくされている。そしてもう一人は、客人の35歳のイギリスの貴族、Lord Warburtonである。正に、最もイギリスらしい設定の中、アメリカとヨーロッパにおけるこの時代の一つの典型とも言える三人の人物が、テーブルを挟んで新旧接点の場を提供している。彼らの話題の中心は、これからアメリカから帰国しようとしている Touchett 夫人と、その彼女に伴って渡英してくるという Isabel という未知のアメリカ娘である。Touchett 夫人は、イギリス在住の夫と共には過ごさず、一年のほとんどをフィレンツェの別邸で過ごしているという少々風変わりな女性だが、彼女がアメリカから送った電報には、—— “...Taken sister's girl, died last year, got to Europe, two sisters, quite independent.” (67) —— とあり、その「ひどく独立している」という文言が、同行する Isabel のことなのか、あるいは、二人の姉妹のことなのか、文字数の限られている電文ゆえに謎めていることが話題に上り、三人の好奇心を誘うやり取りの中で “independent” というアメリカらしい文言が読者の印象に残される。

実際に Isabel が姿を現わすと、その率直な美しい女性に皆一様に魅せられる。貴族の Warburton が出会って三回目で求婚してしまうほどである。Ralph も非常に魅力を感じるが、従妹であることと、自分の絶望的な健康状態ゆえに、最初から傍観者としての役割を決め込んでいる。冒頭の引用は、アメリカで初めて Touchett 夫人と出会った時の Isabel との会話である。夫人は、確かに変り者という評判があったのであろうが、その当人に向かって「あなたがあの頭のおかしい」と開口一番に言ってしまうこのエピソードは Isabel の率直さを端的に表わしているだろう。

1878年、作家の名を一躍世に知らしめた中編小説 *Daisy Miller* のヒロインの Daisy は、あくまでもヨーロッパの因習の中で、自分の行動を最後まで変えようとはしなかったが、Isabel はもっと賢明な女性である。楽しいひと時を過ごした夜、更にもう少し Ralph と Warburton とおしゃべりをしたいと言う彼女は、ヨーロッパでは若い女性が付き添いなしに若い男性とだけ過ごすべきではないと伯母から諭される。Daisy は、奔放にイタリア人男性と二人きりで歩き回るのを年配の同国人女性に窘められた際に、あくまでも我を通して歩き回ることを止めずに颯々的となり、渡欧したアメリカ人たちの社交界から孤立していっただけであったが、Isabel は異なる規範に対する聞く耳を持っている。彼女は積極的な知識欲を持ち、あらゆることを知りたいと願っている。但し、ヨーロッパの行動規範に対して、それにただ黙従するというのではなく、自分の行動の判断材料にして、自分自身の判断で選択して行動したいと思っているのだ。

‘I shall always tell you,’ her aunt answered, ‘whenever I see you taking what seems to me too much liberty.’

‘Pray do; but I don’t say I shall always think your remonstrance just.’

‘Very likely not. You’re too fond of your own ways.’

Yes, I think I'm very fond of them. But I always want to know the things one shouldn't do.'

'So as to do them?' asked her aunt.

'So as to choose,' said Isabel. (120-1)

(…「自分のしたいようにしたいと思いますが、すべきでないことはいつもちゃんと分かっていたいのです」——「それをするために？」「ちゃんと選べるようにですわ」)

作品前半の弾むような印象のIsabelは、作品の後半では、別人のように抑制された姿で読者の前に姿を現わす。周囲の反対を押し切って、真実の愛に身を委ねて結婚したはずの彼女は、その三年後、心の内を誰にも語らなくなっている。これ以上の好条件はないだろうと思われるWarburtonからの求婚を断ったことで、周囲に驚異の念を抱かせたIsabelは、最もふさわしくないとと思われる中年のOsmondというアメリカ人だがヨーロッパに住む、資産のない男と結婚する。財産などに左右されず、その博識と品位の高さに彼女は魅力を感じ、洗練された孤高の人物を人生の伴侶に選んだことで、自分の望み通りの自由な結婚生活が送れると自負していたが——'His being so independent, so individual, is what I most see in him,' (394) ...Mr. Osmond's simply a very lonely, a very cultivated and a very honest man (398)、三年あまりの日々を暮らすうちに、自分の選んだ夫が、実は世間体を気にする俗物に過ぎず、しかも自己中心的で、彼女の自由を抑圧するだけの存在であったと感じている。結婚は、Ralphが予言したように、失敗だったのだ。しかし、Isabelにとって結婚は神聖なものでなければならず、女性通信員という仕事を持ち、当時の最も新しいアメリカ女性を体現するようなHenriettaという友人から離婚を強く勧められても、性格不一致ですぐにも離婚という現代のような考えは露ほども抱けない。自由を第一に考える彼女は、アメリカのピューリタンの価値観の権化でもある。彼女にとって公の場で契りを交わしたOsmondとの結婚は守らなければならない神聖なもので、たとえそれが失敗であったとしても、簡単に解消できるものではない。謹厳なピューリタンの規範に囚われている彼女は、そういう一途な頑なさでも実にアメリカ的存在であると言える。Ralphの猛反対に対して、Isabelが自分自身の選択したOsmondの美点を「独立心のあ」「個人主義の」「とても誠実な」男であると断言していたが、植民地時代から連綿と続いているアメリカの美德、'honesty, hard work, perseverance'というAmerican dream実現の可能性と、独立宣言の"unalienable rights"の行使に通ずる精神を、Osmondの人格の中に見い出したと思っ込んでいる所にIsabelの若さゆえの未熟さが反映されている。

Ⅲ. Ralphの視点

'Ah, Ralph, you give me no help!' she cried abruptly and passionately.

It was the first time she had alluded to the need for help and the words shook her

cousin with their violence. He gave a long murmur of relief, of pity, of tenderness; it seemed to him that at last the gulf between them had been bridged. It was this that made him exclaim in a moment: 'How unhappy you must be!' (512)

(「ラルフ、あなたはちっとも助けてはくださらないのね」彼女は唐突に心から叫ぶように言った。彼女が援助を必要としているなどとはほめかしたのは初めてのことで、その言葉は彼に衝撃を与えた。彼は、安堵と憐れみとやさしさをこめた長い溜息をついた。二人の間の隔たりがついになくなったように思えたのだ。だから、彼は叫んだ。「君は、とっても不幸なんだね！」)

十分な資産家の家庭という恵まれた環境、申し分のない教育も受け、社会に足を踏み出した時に、彼は胸を病み、その後生涯、療養生活を余儀なくされてしまう。偏りのない人格形成のために、アメリカとイギリス両方の名門大学で学んだという彼は、元来自由な生き方に憧れを持っているが、我が身に付きまとう死の予感から、若者らしくない達観した様子があり、皮肉な見方が身についているような青年である。彼も、美しく無垢な従妹の Isabel に一目で魅せられるが、その想いは屈折せざるを得ない。そこには、作家の夭折した従妹のミニーに抱いた想いが投影されていると言われている。⁽⁵⁾ Ralph はその短いと運命づけられた生涯を Isabel の人生の輝きを観察することに意味を見出す決心をする。

彼は幼少よりヨーロッパで育ち、新旧の価値観に対しての柔軟性があるという点で、*Daisy Miller* の Winterbourne の再来にも思われるが、常に死の恐怖と背中合わせであるという状況ゆえに、Isabel への視線ははるかに切実である。—— Having convinced himself that he is not himself in love with his fascinating cousin, Ralph Touchett finds a daily interest in watching her progress and imagining the chart of her boundless future.⁽⁶⁾ 女性の誰でもが喜んで受けるであろう Warburton からの求婚を、ヨーロッパの中のごく限られた世界に囚われてしまう状況と捉え、それを自由からの束縛と感じて、彼女が結局拒絶したということが、Ralph にとってはこの上もない快挙に思われた。自分自身が人並みの人生の期間を生きられないというのであるなら、思う存分自由に生きることで、この美しい従妹に自分の人生の埋め合わせしてほしいという願いを持ち、死期の近い父親に Isabel 本人には内緒で、彼が受け取るはずの遺産の半分を相続させるという約束を取り付ける。誰が見ても申し分のない貴族の求婚を断るほどの独立心を持っている Isabel なら、何物にも縛られず、—— 'You were the last person I expected to see caught.' (392)、しなやかに自由な人生を送ってくださると、そして、その彼女の生きていく姿を、残された時間の間に見守ることが自分の生の望みになるであろうと痛切に思ったのである。

その彼女が、不審な Osmond と結婚するという。Ralph は切羽詰まった危機感を覚え、必死で彼女に苦言を呈する。—— 'Because you're going to be put into a cage. (392) —— 「檻に入れられてしまう」という最も嫌うはずの状況に、嬉々として自ら入って行こうとする

Isabel、こんな絶望を一年前に想像できたであろうか。彼女の翻意を強く望む彼が、いつもの冷静さを失い言葉が過ぎてしまったことで、二人は物別れになる。Ralphがのちに語るように、彼もまた失敗したのである。これ以降、心を閉ざしたIsabelの真意は全く分からなくなってしまふ。冒頭の引用は、久しぶりにローマで再会した二人の会話だが、Isabelはその心情をつい吐露しそうになるのだが、また硬い殻に閉じこもってしまうのだ。作品の中で、具体的に彼女の三年間の結婚生活については全く語られていないが、後半の彼女の変貌ぶりに、かえってその結婚生活の不毛さを読者は感じ取るのである。—— most unwisely, she marries him. Soon her “open” world is confined within his “closed” one in their life in a Roman palazzo, having the cold, cruel associations of a dungeon.⁽⁷⁾

IV. 新旧価値観対比の代表者たち—— Merle夫人とOsmond、HenriettaとGoodwood

‘What do you want to do with her?’ he asked at last.

‘What you see. Put her in your way.’

‘Isn’t she meant for something better than that?’

‘I don’t pretend to know what people are meant for,’ said Madam Merle. ‘I only know what I can do with them.’

‘I’m sorry for Miss Archer!’ Osmond declared. (291)

〔僕にその女をどうしろと？〕彼はやっと尋ねた。「分かるでしょ。ものにするのよ」

〔その娘にはもっとましな生き方があるんじゃないのかい？〕「他人がどういう人生を送るはずだったかなんて知るつもりもないわ。ただ、どう利用できるかだけだわ」とマール夫人が言った。「ミス・アーチャーも気の毒なことだ」とオズモンドははっきりと言った)

作品には常に作家の目が存在し、個々の登場人物自身には窺い知れない場面を見せたり、彼らの心情を語ってくれるので、読者である私たちは、作家と共に個人の枠を超えた世界を垣間見ることができる。Merle夫人は、Isabelの伯母の友人で、Osmond同様、ヨーロッパ生活の長い女性である。夫の死後ヨーロッパ各地の友人宅を泊まり歩き、どこでも歓迎される人徳のある女性であるというのだが、その背景は謎めいている。Touchett氏臨終の間際にTouchett家にちょうど滞在しIsabelと出会い、部外者同士親密な間柄になる。Merle夫人の完璧なまでの洗練した上品さにIsabelはすっかり魅了されてしまうが、Isabelの目に映るあまりの完璧さはかえって読者の不審を誘う。一体この世に綻び一つない完璧な人間などあり得るのだろうか、と。まだ人生未経験の若い娘には、落ち着いた年上の女性の優雅さがこの上もない憧れと思われることがある。それぞれ自分自身で歳を重ねる毎に増えていく人生経験を、自分よりずっと先に経験済みという落ち着きが、若い女性には魅力に思われるのであるが、大抵の場合、初対面がその評価の絶頂となる。夫人自ら告白するように、そこには仮面がつけられており、物語

の進行と共にそれは徐々に崩されていくことになる。随所でその綻びを意識し、不信感を抱きながらも、夫人の思惑に Isabel だけが最後まで気が付かないのである。—— For Madame Merle, sophisticated and generous, competent and manipulating, cultivated and rapacious, will be the one to act as representative of and temptress to the third and final impediment to Isabel's true freedom.⁽⁸⁾

Isabel が若い女性には不釣り合いな大変な遺産を相続したという知らせの後に程なく、フィレンツェの Osmond の家には、Merle 夫人の姿がある。彼の娘 Pansy が修道院から帰宅する際に居合せた彼女はそこで、Isabel に求婚するように Osmond を説得する。一人娘 Pansy に対する Merle 夫人の態度には、妙に切実さが感じられ、読者の目には、二人の男女の関係が不審なものに映る。この時点で、かつての愛人 Osmond と、実は二人の子供である Pansy のために、Merle 夫人の手によって Isabel との結婚が仕組まれるのである。

Osmond は Ralph とは違い、自分以外の人間に「自由」も「独立」も許さない。—— Unlike Ralph, Osmond cannot smile at himself. His self-importance tolerates no levity, and he permits no personal freedom in those close to him, who become mere satellites of his egotism. He makes art superior to life, as Ralph does not. Ralph wishes to set Isabel “free,” as Osmond wishes to deny her even the smallest remnant of her individuality.⁽⁹⁾—— ヨーロッパ大陸でしぶとく生き抜いてきたこの二人、Osmond と Merle 夫人は、洗練さで上塗りされた「退廃」で、新大陸の申し子 Isabel の「無垢」に痛恨の試練を与える役割を担っている。彼らは、Isabel という女性の人間としての成長において、その邂逅が必然の人物像なのである。

また、物語の進行の中で何度も繰り返し現れる、女性記者 Henrietta と不屈の求愛者 Goodwood は、アメリカそのものの体現者であり、新大陸側からの Isabel の試金石である。両者共、American dream の実現者たち、それぞれがいわゆる “self-made man” であり、Isabel の人生の主要な局面に出現し、自由と自立を甘受したアメリカ的価値観で彼女を揺さぶる。Henrietta は記者としての身分を最大限に利用し、女性一人でも付き添いなしでヨーロッパをその手中に捉えようと大陸の至る所に果敢に挑んでいく。Goodwood は父親の工場を継いだとはいえ、独立独歩で更に前進し成功を収めた若き実業家である。彼は、作品の中で五回も Isabel に拒絶されながらも果敢に求婚し続ける。二人は、アメリカロマンティシズムの中に見られる、個人の中に無限を見出すという類の楽観的な人物像で、作品にある種の滑稽さを醸し出している。このように、Osmond と Merle 夫人、Goodwood と Henrietta それぞれが、新旧大陸の体現者としての役割を担っていると言え、その二極の価値観の間で、ヒロイン Isabel は揺れ動いているのである。

Goodwood のヒロインに対する愛は誠実で、最終的には Ralph 公認ですらあるらしい。Isabel は Ralph の亡くなった後もイギリスにとどまり暫し逡巡の日々を送るが、結局は Goodwood の手を振り切って、恐ろしい夫のいるローマに戻って行く。最後のクライマックスの Goodwood との場面は当初、“His kiss was like a flash of lightning; when it was dark again she was free.”⁽¹⁰⁾ と

だけ表現されていたが、彼からの激しいキスは、最終版では次のように詳しくヒロインの心情が説明されている。——“His kiss was like white lightning, a flash that spread, and spread again, and stayed; and it was extraordinarily as if, while she took it, she felt each thing in his hard manhood that had at least pleased her, each aggressive fact of his face, his figure, his presence, justified of its intense identity and made one with this act of possession. So had she heard of those wrecked and under water following a train of images before they sink. But when darkness returned she was free”. (635-6) ——新大陸時代から結婚後もずっと、繰り返し Isabel の元に現れては愛を語る Goodwood に対して、彼女は自分に対する彼の愛の真実性は信じていたものの、どうしても違和感を抱き、彼の誠実さゆえに罪悪感を感じながらも、結局拒絶し続けてきた。自分に対する強い愛は信じていたが、実はそれは違っていたということに——“She had believed it, but this was different. (634)、この最後の場面で悟る。この「電光のよう」な彼のキスには、彼女がそれまで嫌っていた男性としての押しつけがましい所有欲が集約されていた。難破者が海に沈みゆくその短い間の中でみるというイメージのように、Isabel には、彼の彼女に対する今までの愛の実態がみえたのである。そして、その「電光」が去った時に、彼女は「自由」を感じたのだった。

作家が序論で述べているように、この作品は、一人の Isabel という娘の存在を実感を持って描き出すために書かれたものであり、彼女を取り巻く人々は、彼女の実像に迫るために自然発生的に湧き出てきた人たちなのである。⁽¹¹⁾ —— In their various ways, these, and lesser characters, help to balance and to deepen the portrait of Isabel. In her the new woman is set forth with a psychological insight that looks toward the twentieth century.⁽¹²⁾ Isabel の「無垢」は、Daisy のように闇雲に我を通すことにより、あっけなく滅びてしまうのではなく、あらゆる二重性の洗礼を受けてもなお、自由を獲得するべきものなのであり、こうして Isabel は人間として一つの成長をしたと言えるだろう。——ジェイムズの最大の関心事は、あくまでも人生と芸術との関係であり「小説は人生から素材を得るべき」とした。それをより豊かな土壌、想像力の中に移して内的成長をさせれば、「そのリアリティは人生の現実よりも真実となる」と考えた⁽¹³⁾ ——のである。

V. 結論

作家がその晩年の春から秋にかけての期間を過ごした Lamb House は、1940年にドイツの爆撃を受け、屋内のものは作家の200冊もの蔵書を含め破壊されてしまったが、幸い建物自体は生き残った。1950年に遺族によって National Trust の手に委ねられ、現在は、歴史的建造物として管理されており、⁽¹⁴⁾ 三月から十月までの期間、火曜日と土曜日の午後二時から五時の四時間だけ公開されている。残念ながら彼が執筆を行っていたという二階に立ち入ることはできないが、作家自身が過ごした空間にいつとき身を置けば、作家の目からが見えたであろう光景を

体感できる。——「それはこれまで考えたこともなかったほど閑静な、しかも楽しい家でして、ゆるやかなピラミッド状の丘の頂き、古風な、玉石を敷きつめた道に草がのぞいている、赤い屋根のつらなる町なかにあります。品のよい古い教会の近くですので、美しい、古びた、赤い塀に囲まれたわが家の庭にも、教会の鐘が快くなり響きます」⁽¹⁵⁾ 筆者が訪れた八月の火曜日はお天気恵まれ、予想以上の人が作家の人生を垣間見ようと訪れていた。部屋の戸口に掲げられている見覚えのある作家の肖像画のレプリカは、全体が赤茶色の板に描かれ少々異様な印象も受けるが、ロンドンの本物同様、見る者の心の中をじっと観察するような眼差しを向けている。人は、無意識のうちにその心を隠し、中々その本音を明かさない。そして、嘘と認識しない嘘をつく。実は、本当の心を本人自身も掴めていない。常に様々な思惑が心の中で交錯している。その微妙な心の動きに作家はペン先を向けたのである。

結婚が失敗だと十分に分かり、死の床のRalphと究極の和解をした後、IsabelはGoodwoodの更なる求愛を跳ね除け、結局はまたローマに戻っていく。その後、どういう選択をするかは読者には明かされていない。Goodwoodから見ると、彼女が自らの幸せをまた殻に閉じ込め、再び暗黒の家に戻ってってしまうかのような印象を受けるが、彼女は、夫の反対を押し切って、不安のままにローマを離れた時の彼女ではもはやない。恐れを知らない無垢な娘から、自由を求め、求めたがゆえに過酷な心の挫折を味わい、押し込められ、身動きの取れない中で、諦めの皮肉の中に安住していた彼女は、Ralphとの言葉数は少ないが深遠な和解の中で成長した。Gardencourtに初めて訪れたその夜に彼女は、こんなロマンチックな古い屋敷には幽霊がいるだろうと——‘Please tell me--isn't there a ghost?’ (100) ——無邪気に尋ねた際、苦悩を知らない「若くて幸せな無邪気な女性」には見ることはできないとRalphに言われたことがある。Ralphとの和解の後、彼の臨終間際に、その彼女がついに「幽霊」を見る。彼女は、「幽霊」を見られるだけの苦悩を味わい、「幽霊」を見る資格を得たのだった。—— She apparently had fulfilled the necessary condition; for the next morning, in the cold, faint dawn, she knew that a spirit was standing by her bed....It seemed to her for an instant that he was standing there -- a vague, hovering figure in the vagueness of the room. She stared a moment; she saw his white face -- his kind eyes; then she saw there was nothing. She was not afraid; she was only sure. (624) 物語の最初の苦悩を知らない無垢なIsabelは、かつて無邪気に「怖くはない」と言っていたが、最後にRalphの死の瞬間を彼の魂の息吹で感じ取った時、実際に「怖くはなかった」と思う。彼女は、愛する人の死を正確に察知したのである。

この長かった物語の結末は曖昧で、読者にその心情を激白したIsabelは、その姿を現さずにロンドンから消えてしまう。彼女がローマに戻って行くとGoodwoodに告げるHenriettaの言葉だけで唐突に終わっている。最後のGoodwoodの彼女に対する力強い救いの申し出は拒否されたのだ。この作品に対しては、作家のそれまでの「最高傑作」という高い評価——“the most eminent example we have had thus far of the realistic art of fiction.” / no “work

printed in recent years, on either side of the Atlantic or on either side of the English Channel, surpasses this in seriousness of intention, in easy scope and mastery of material...In every detail of execution this book shows a greater facility, a richer command of resources than any of its predecessors...It is properly to be compared...with the greatest and most serious works of the imagination.”⁽¹⁶⁾ ——と共に、この締め括り方には異議を唱える意見も多い。やっとヒロインの心が浮かび上がって来たかと思った次の瞬間に、また彼女は飛び立って行くのである。Goodwood同様肩透かしに合ったような気になってしまう読者も多いだろう。

新旧の価値観の狭間に一人の娘を置き、その人物を外と内から描き出すことによって、作家は常に選択する人間の实像に迫ろうとした。作家は作品の初期の段階で、Isabelがとても愚かしい行為との代償に一貫した賢明さを会得するようになるのだ —— later, she became consistently wise only at the cost of an amount of folly which will constitute almost a direct appeal to charity (157) ——と予告していたように、作中の彼女は、自我の自由を求めようとして、最もそれを許さない結婚相手を選んでしまうという愚行を犯す。実は、彼女の自由を求める独立心旺盛さは、読書好きの彼女にとってあくまで想像上のものであったと言える。⁽¹⁷⁾ 当時の女性の社会通念として、最終的には自分も当然結婚をしなければならないとは思っているが、今はしばらく自由でいたい、それが彼女の本音であったろう。アメリカでは、漠然とGoodwoodが結婚相手の候補となっていたものの明確な言質は与えず、イギリスに渡ってからは、申し分ない求婚者 Warburton が現れたが、現実には求婚相手が現れると彼女は尻込みしてしまう。多額の遺産も、それが現実であるなら重荷でしかない。皮肉なことに、他者の自由を絶対に認めない Osmond は、財産を持たないがゆえに彼女にとって格好の相手となってしまったのである。間違った結婚は、彼女自身の選択だったのである。

ヒロインが当初求めていた自由は、漠然とした言わば書物の中に出てくるロマンティックな自由であったが、試練を体験した後の自由の獲得は、確固たる自由の獲得である。Goodwood に身を委ねる選択をするのは、また別の拘束を選択することになり、彼女の自主性は失われる。物語の最後の彼女は逃げたのではなく、真っ向から自分の人生に立ち向かうために、ローマという彼女自身の現実に帰って行ったのだと思う。作家が物語の中心に据えた Isabel の六年に渡るヨーロッパ生活の中に、未経験の無垢から人間としてどのように成長していくのかという意識のドラマが展開されているのだが、そこには時代を超えた普遍性がある。

個人の視点には限界がある。通常私たちは自分に見えている意識世界が自分だけのものに過ぎないということに気が付いていない。隣人も同じ景色を見、同じように感じているとつい錯覚してしまう。視点が違えば見る景色が違い、認識も異なる。それぞれの思い込みも種類が違う。James の作品は、異なる人間の視点からみえる景色を登場人物と共に追体験させてくれるのだ。私たちに個人の視界の狭さを実感させ、そこから各時代共通の人間関係の難解さを思い起こさせてくれる。作品鑑賞の過程で、一人の人物の視界の中に実感を持って入り込むことで、違った見え方の可能性に気づかされる機会は、現代のこの複雑な社会の中での人間関係を考える

上で、とても有意義な体験であると思う。—— They accumulate, and we are always picking them over, selecting among them. They are the breath of life -- by which I mean that life, in its own way, breathes them upon us. They are so, in a manner prescribed and imposed -- floated into our minds by the current of life. ⁽¹⁸⁾ (それらは積み重なり、私たちはいつもあれこれと選んでいる。それらとは人生の息吹である。——つまり、人生は、それ自身のやり方で、私たちにその息吹を吹きかける。処方されたり、強要されたりして、人生の流れによって、私たちの心の中に漂ってくるのだ)

【注】

- (1) 秋山正幸著『ヘンリー・ジェイムズの国際小説研究』（南雲堂、1993）、p.10.
- (2) Robert Emmet Long, *Henry James: The Early Novels* (Twayne Publishers, 1983), p.103.
- (3) 大橋健三郎著『古典アメリカ文学を語る』（南雲堂、1992）、p.202.
- (4) テキストは、Henry James, *The Portrait of a Lady* (Penguin Classics, 2003) を使用し、引用は全て本書からである。引用中の下線は筆者によるものである
- (5) 谷口睦男編『ヘンリー・ジェイムズ』（研究社、1967）、p.21.
- (6) S. Gorley Putt, *A Reader's Guide to HENRY JAMES* (Thames and Hudson, 1966), p.140.
- (7) *The Early Novels*, p.108.
- (8) *A Reader's Guide*, pp.141-2.
- (9) *The Early Novels*, p.112.
- (10) *Ibid.*, p.103.
- (11) 多田敏夫訳『ヘンリー・ジェイムズ「ニューヨーク版」序文集』（関西大学出版部、1990）、pp.53-6.
- (12) Bruce R. McElderry, Jr., *HENRY JAMES* (Twayne Publishers, Inc., 1965), p.63.
- (13) 芦原和子著『ヘンリー・ジェイムズ素描』（北西堂書店、1995）、p.150.
- (14) Oliver Garnett, *Henry James and Lamb House* (The National Trust, 1999), p.16.
- (15) 工藤好美監修『ヘンリー・ジェイムズ作品集8 評論 随筆』（国書刊行会、1984）、p.551-2.
- (16) *The Early Novels*, pp.102-3.
- (17) 藤野早苗著『ヘンリー・ジェイムズのアメリカ』（彩流社、2004）、pp.82-3.
- (18) Henry James, *The Portrait of a Lady*, PREFACE (Penguin Classics, 2003), p.44.

(平成25年11月6日受理)